

5. 5 めとる：アンケート抄：Q.〇〇の結婚（式）？

Facebook&twitter「とある民俗学講師の補足メモ」

- ・ 婚姻の前近代：「嫁」という資源（生産力&再生産力）の分配、手続きは複雑なほうが良い？
- ・ 婚姻の近代：婚姻圏の拡大、仲介者の重要性の増大、婚礼の華美化＝商業化（ex. 神前結婚、仏前結婚）
- ・ 婚姻の現在：ロマンティック・ラブ・イデオロギーの「形式的」持続、「婚活」そして「非婚」の時代へ

【婚姻の決定】私の父方の曾祖母の結婚について祖母から聞いた。曾祖母は明治43年神戸生まれ。高祖の教育方針で Finishing school という、裁縫や料理といった家庭内の実務だけでなく、花道や茶道といった良家のお嬢様としての嗜みとしての芸道など一通りを仕込む花嫁修行の課程を受けたそうです。当時の結婚に際して一番大切なのは、仲人が取り持つ「お見合い」。仲人は、前々から両家をよく知っており、家柄の釣り合い等も考慮してマッチングを考えてから、双方の家に声を掛けたものと思われます。まず、本人個人の履歴・情報が全て書かれた「釣書」（写真も添えてある）を交換。釣書で合格のあと、お見合いへ。曾祖母の場合、1931年、旧甲子園ホテルでお見合いをしています。その頃の結婚は家と家との結びつきであり、恋愛結婚は珍しかったようです。当時は、お見合いの次に合うのが結婚式、新婦は新郎の顔も覚えていないこともあったそうです。

【嫁入道具】両親に当時（約20年前）の結婚式について聞いたところ、母は着物専用の和筆筒と洋服筆筒を嫁入り道具に持参、当時は筆筒を何竿持っていかで親の見栄もあったそうです。また、荷入れのトラックがバックするのは縁起が悪いので、対向車が来たら、相手にお金を渡してバックしてもらったそうです（愛知県一宮市）。

【花嫁のれん／たもと酒】私の両親の結婚式は1998年5月、石川県白山市の白山比咩神社で行われました。両家の意向で、加賀地方の伝統的な婚礼が行われたそうで、花嫁のれんも用意しました。これは、花嫁が結婚式当日、嫁ぎ先の仏壇参りを行う際にくぐる加賀友禅で優雅に染められたのれんのことで、仏間や座敷の入り口にかけて花嫁を迎えます。一生に一度しか使用しないそうです。様々な柄がありますが、私の母方の家の家紋を朱色にし、柄はおしどりで仕立てたそうです。加賀地方の伝統的な婚礼は他にもあり、たもと酒というものも教えてもらいました。たもと酒とは、新郎の親が新婦の家に一升瓶とスルメを持参し、結婚の話がまとまれば、持参した酒で祝うしきたりです。この段階で話が破談になった場合に女性が傷つくので、夕方こっそり着物の袂にかくして準備したことが名前の由来だそうです。

【式当日】祖父母の結婚式は昭和40年12月3日、京都府相楽郡和東町にある祖父の自宅で行われ、三日三晩親戚やご近所の方、友人が集まり、食事をしてお酒を飲んで手拍子で歌を歌ったりして結婚をお祝いした。写真屋さんが来て、全員で記念撮影をした。おばあちゃんの家美容師さんが来て、角隠しの着付けをしてもらい、タクシーで祖父の家に向かった。料理は近所の方や親戚が家で焼き焼きを準備し、茶碗蒸しやお造り鯛などは、仕出し屋さんが配達してくれた。2日目3日目は祖母が訪問着に着替え、祖父はスーツに着替えた。三日三晩祖父がたくさんお酒を飲んだので、4日目新婚旅行に行く時、空港までフラフラでまっすぐ歩けなかった。

【教会婚】私の両親は、母の長年の憧れを反映し、二人ともクリスチャンではないのに東京・渋谷の「広尾教会」で、2003年11月20日に式を挙げました。当時はお金がなかったらしく、式から披露宴までをウェディングドレス一本で過ごしただけでなく、メイクもフラワーアレンジも写真撮影も、友達や親戚がすべて務めたうえ、ウェディングボードは母の仕事でもあった粘土人形によるものだったそうです。

【おいり】今からおよそ60年前、香川県の綾歌郡にて祖父母がお見合い結婚した。祖母は香川県の東部の出身、祖父は西部の出身。祖父が長男であったためか、結婚式は祖父方の実家で行われ、祖父方の親戚が大勢駆けつけ、披露宴は二日

に分けて行われた。また、この披露宴に来た人たちに「おいら」というお菓子を配った。これは祖母のいた地域ではなかった風習のようだ。祖母は嫁入り道具を持参したが、なんとその嫁入り道具を、披露宴に駆けつけた祖父の親戚や友人たちが見たり触ったりしていたらしい。祖母は儀礼的な部分が済んだのちは別室で休んでいたようで、その間、祖父方の友人たちで宴会が行われていた。式は基本的に地域の人たちが協力し、式の進、料理など、それぞれ役割が分かれていた。

[め] 私の両親は2001年2月19日に神戸メリケンパークオリエンタルホテルにて西洋式の結婚式を行った。父は和歌山市、母は伊丹市の出身。祖父母同士以外は初対面だったため。式当日に親戚同士の顔合わせと家族紹介も行われた。また別の日に、父方の実家は、近所に中身が空の祝儀袋の束を配ったようである。祖母曰く、この風習の名は「め」といい、祝儀のお返しの意が込められているとの事。

[韓国] 私の叔母さんは2014年の5月、韓国ソウルの明洞にて結婚式を挙げた。流れとしては、初めに結婚式を行い、その後、韓国の民族衣装であるチマチョゴリに着替えて、幣帛（ペベク）と呼ばれる伝統的な婚礼儀式を行った。その後、用意されたビュッフェ会場へと向かい、食事の後は自由解散。韓国の結婚式は日本と比べてカジュアルであった。

[中国] 私の父母は、2002年、中国辽宁省瀋陽の都市部において婚礼を行った。父母の婚姻儀礼は、双方の家族の準備、迎いの儀式、新居での儀式、ホテルでの式典、宴会、そして新郎新婦の初夜に至るまで、複数の段階に分かれて行われた。

新婦は早朝に起床し、身支度を整えた後、化粧師によって化粧が施される間に、指輪や赤い靴、ウェディングドレスが準備される。また、家族は式典会場の調度品の設置や、儀式で使用する麺を茹でるなど、さまざまな準備を進める。

新郎は身支度を整えた後、新婦を迎える段取りを確認する。婚礼車が新郎の家を出発し、新郎が新婦の家に訪れる。新郎が新婦の家に入ると、両親に深々とお辞儀をして敬意を表し、呼び方を「お父さん」「お母さん」と改める儀式が行われた。その後、胸に花をつけ、相手方の茹でた麺を食べた。新郎は新婦を婚礼車に乗せ、車の中で新婦は新しい靴に履き替えた。祝砲が鳴らされ、車は新居へと向かった。

新郎新婦が新居に到着すると、さらに爆竹が鳴らされ、賑やかな音楽が奏でられる。新婦はここで改めて新郎の両親を「お父さん」「お母さん」と呼んだ。両親からお金や贈り物が手渡される。

その後、ホテルに移り、司会者が式典の開始を宣言。新郎新婦は指輪を交換し、誓いを立て、証人や来賓代表が祝辞を述べた。最後に、新郎新婦が乾杯し、出席者全員に感謝の意を表す。宴会が始まると、新郎新婦は来賓にタバコを配りながら感謝を表し、席を回って乾杯を行う。新婦側の親族はこの段階で退席し、新郎側の家族から返礼の贈り物が渡された。

宴会後、両家の家族が集まり、食事が行われる。食事が終わると、新郎新婦は新婚の部屋へ入り、ナツメヤシやピーナッツなど、子宝を象徴する品々を部屋に配置した。初夜を経ることにより、新婚生活が正式に始まった。

[人前式] 両親は2001年10月に北海道苫小牧市にあるホテルニドムで親戚、友人合わせて80人ほどで開催した。母親曰く、本州の結婚式は招待制で会費等はなく、その分をご祝儀として渡すやり方だが、それに対して北海道は会費制で、両親の結婚式では1人1万円とした。会社の人は呼ばなかったためアットホームな結婚式だったそうだ。

[海外婚] 私の両親の結婚式は1998年の4月にハワイで行われた。披露宴は日本国内で行ったが、結婚式はお互いの両親のみを招待する形で、海の見える教会で行った。両親から祖父母にプレゼントを贈ったところ、そのプレゼントに感動して涙を流していたのが印象的だったと言っていた。

[レストラン婚] 私の両親は2000年6月24日に日比谷富国生命ビルにある聘珍樓という中華料理店で、レストランウェディングを行った。ミレニアム婚とジューンブライドが流行っていたことと、24日が私の父の誕生日であったことから、この日付にしたそうだ。形式は人前式で、親戚と親しい友人を呼び、比較的少ない50人ほど。厳かな式が好みではなかったため、食事会でついでに結婚を祝って頂くくらいの感覚だったという。現在でも結婚記念日や節目でのお祝いにこのレストランを利用しており、本人達としてもとても満足のいく場所選びと式であったそうだ。